武蔵野日曜集会

我は門なり
――ヨハネ伝第10章1～21節――

１９８４年９月16日（武蔵野）
小池辰雄

我は羊の門なり　天国への門　百行は一死に如かず　我はキリストの門なり　我は善き牧者なり　愛知　一つの群ひとりの牧者　生命を捨て生命を得る

【ヨハネ10・1～21】

1『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる
者は盗人なり、強盗なり。2門より入る者は、羊の牧者なり。3門守は彼のた
めに開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。4悉と
く其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。
5他の者には従わず、反って逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり』6イエス
この譬を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。
7この故にイエス復いい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。
8すべて我より前に来りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。
9我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を
得べし。10盗人のきたるは盗み、殺し、亡さんとするの他なし。わが来るは
羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。11我は善き牧者なり、善き
牧者は羊のために生命を捨つ。12牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、
豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、――豺狼は羊をうばい且ちらす――
13彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。14我は善き牧者にして、我がものを
知り、我がものは我を知る、15父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊
のために生命を捨つ。16我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導
かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。
17之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を
捨つる故なり。18人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我
は之をすつる権あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたり』
19これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争おこり、20その中なる多くの
者いう『かれは悪鬼に憑かれて気狂えり、何ぞ之にきくか』21他の者ども言
う『これは悪鬼に憑かれたる者の言にあらず、悪鬼は盲人の目をあけ得んや』

●我は羊の門なり

ヨハネ伝9章の方でパリサイ人がキリストのことを貶した。けれども、盲人の方が、

「25答う『**かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり**』」

と、体験と事実をもって答えた。パリサイ人は相変わらずユダヤ教の観念信仰で、そして律法信仰で、いわゆる祭司宗教です。日曜日には何もしてはいかんとか。

日曜日はもちろん我々はこうやって集会をしている。これは絶対に形式ではない。私も学生時代から日曜は本当に守りました。翌日が試験であっても日曜は勉強しない。これは内村先生が『余は如何にして基督信徒になりし乎』に書いておられる。私の兄貴も実行していた。それで私も実行していた。天野先生がやっぱりそれを実行した。天野先生の自伝の中にも書いてある。そういうわけで、もちろん形式ではなくて、特に無教会はそういうことはよく守ります。無教会も単に形式とは私は言いません。けれども、そのこととキリストが律法を破ったということは次元がちがう。キリストも本当の意味では、

「**安息日にも我らは主なり**」

と言って、主体的にこれを守っておられた。

1『**まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は盗人なり、強盗なり。**

「まことに誠に」という、最初からこういう言い方をして、キリストが心をこめて仰るわけです。キリストが、

「**盗人なり、強盗なり**」

と言った内容は、「偽善なる学者、パリサイ人」のことを暗にほのめかしている。

2**門より入る者は、羊の牧者なり。**

門から入る者は羊の牧者だと。柵がちゃんとあって、門がある。そして門守がそこにいる。狼なんかにやっつけられるから、羊はもちろん夜は檻に入れられるわけです。他から入ってくるものは狼みたいなやつで、それは盗人で強盗だというわけです。

3**門守は彼のために開き、羊はその声をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。**

羊はその声を、即ち牧者の声を聞いて、牧者はまたその名を呼び、引き出す。羊に名がついていると見える。我々には同じような顔しているように見えるが、けれども、牧人にはそれが分かるんですね。

4**悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、**

今度は、外では守るわけだ。外敵がいるから。

羊その声を知るによりて従うなり。5**他の者には従わず、反って逃ぐ、他の者どもの声を知らぬ故なり**』

犬もそういうところは非常に忠実です。飼い主の他には吠えたり、ヘタすると噛みついたりする。羊は噛みつかないけれども、かえって逃げてしまう。

6イエスこの譬を言い給えど、彼らその何事をかたり給うかを知らざりき。

前のご連中に、パリサイ人たちに語っているわけです。

7この故にイエス復いい給う『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。

8すべて我より前に来りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聴かざりき。

祭司だとか学者だとかパリサイ人だとかは大いに先んじているわけです。ところが、ダメだ。羊はこれに聞かなかったと。自分の声は違うから。

●天国への門

9我は門なり、

今度は、「我は門なり」とはっきり言っている。非常に簡単に。

おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。

みんなこれは比喩的な言葉です。キリストからいただく草は霊的な食物です。今日は、「我は門なり」という9節を中心にした題にしました。

10盗人のきたるは盗み、殺し、亡さんとするの他なし。わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。11我は善き牧者なり、

「我は門なり」と言ったかと思うと、今度は、「牧者なり」と言う。

善き牧者は羊のために生命を捨つ。12牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、――豺狼は羊をうばい且ちらす――

13彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。

キリストは門だと。「門守」という言葉がありますね。この「門守」は、註解者によっては、「神さま」だと言う人がある。あるいはいろんなことを言いますけれども。これは伝道者。門守が神さまだというのもちょっとおかしいでしょうね。一体、「門」というのは、キリストがこの譬話で仰るけれども、どこへ行く門かというと、もちろん天国への門です。神さまの国――天国は神さまの支配するところ――神の国に至る門。また、ヨハネ伝14章にいくと、

「我は道なり」

とも仰る。キリストは道でもあるし、門でもある。門という字はギリシア語では「トゥーラー」という。「ドア」です。扉、門扉なんだ。キリストは、

「私を通らなければ父のもとに行かれない」

と別な言葉で言ってます。

キリストの門としていろんな集会がある。「その門を叩く」なんて言う。先生の門を叩く。どこの集会へ行こうかと。集会の門がキリストでないような集会はダメなんだ。どんなに

立派な会堂があってもダメ。キリストは枕するところがない人だった。無枕であった。無枕の枕とでも言いますかね、至る所を枕とした。だから、キリストというひとは無門の門なんです。どこの集会がキリストの門だと、そんなことは人が限定するわけにいかん。どの集会であろうと、カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、無教会であろうと――無教会は門がないなんて言っているけれども――無教会であろうと、幕屋であろうと、召団であろうと、何であろうと。本来は、至る所これキリストの門なんです。ところが、ひょっとすると、至るところキリストの門でないかもしれない、そこにキリストが居なければ。

キリストという門は見えない。限定できない。だから、これは「大道無門」という。

「大道無門、千差路有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん」

という。これは『無門関』の序のところに書いてある有名な言葉です。天下の大道。天道だね。

「狭き門より入れ」

なんてキリストは言われた。キリストというのは狭き門。道は細いと言う。およそ大道無門とは違うようだね。今は、「狭き門」というのは、よく入学試験の関門のことについて言われているけれども、あんな入学試験みたいな狭き門は困るよ。今はそれで日本の教育はおかしくなってしまった。キリストの福音ではないよ、あの狭き門は。

「狭き門」というのは、身体一つしか入れない。何も持って入れない。手ぶらで行けと。私に言わせると、「狭き門」とはそういうことです。「針の穴」という門だ。ラクダがなかなか入れない。あるがままの身一貫でなければ通れない、このキリストの門というのは。ところが、そこを通ると、その先は広々とした詩篇23篇のごとし。では、その門はどこにあるかというと、どこにもない。キリスト自身が門なんですから。

「どこにもないが、至るところにある」

と、こういうわけです。

だから、この集会にはキリストがいらっしゃる、御霊のキリストが。私ははっきりとこの集会はキリストの門だと申し上げることができます。では、証拠は何か。どこにそんな証拠があるのか。

「先生の講義がいいから」

と、そうじゃないよ。証拠はどこにあるんですか。証拠は我々一人びとりが、今度はキリストの門にならなければダメなんです。

「汝らはわが門なり」

という言葉はないよ。けれども、我々はそうならなければダメです。我々がキリストの門にならなければ、そこにキリストの門ありとは言えない。「汝らはわが門なり」とキリストが仰ってくれればわけないんだけれども、書いてないから、私は御霊の力でそれを読んだ。

あなた方一人びとりが門です。

「さぁ、お入りなさい。私のところに来なさい。福音を本当に受けさせてあげますよ。

私が門ですから」

と、こういうわけです。皆さんは門です。「それは問題だ」なんて言っては困るよ。

●百行は一死に如かず

「百聞は一見に如かず」

という。今度は私は、

「百見は一行に如かず」

と言う。ああ本ものだと見ても、自分がそれを実存しないことにはダメなんです。宗教、道徳の世界は実践の世界で、語る世界ではない。見る世界ではない。聞く世界ではない。そこを生きる世界、そこを行う世界です。「百見一行に如かず」と言う。今日初めてこれを言う。今度は、

「百行は一死に如かず」

という。百の行いも一つの死にかなわない。

「善き牧者は羊のために生命を棄てる」

とあるでしょ。これが「一死」なんです。死の力は――私の兄は私のために死にました――それは私にとって生涯の力なんです。

１３２１年9月14日はどういう日か知ってますか。一死をした人がいる。ダンテです。私の大好きな詩人のダンテ。ダンテとゲーテは、私の詩には二人の非常に大きな力になる。

我々自身が本当に門という実存になり――この次に出てくる道――道にならなければダメなんです。その行の極限が死なんです。ただ死ぬのではない。行の極限として死ぬ。だから、その死はもの凄い白熱的な力を持っている。行は即ち、証人であること。証人であるということは、

「聖霊がくれば、力がくるぞ。お前たちはそれで証人となれるぞ」

と。力が来るから行ぜざるを得ない。その力を受けることが信なんだから。受ければ直ちに行なんだ。これが信行一如ということ。力を受けるんですよ、この信というのは。

「キリストは神の子である。贖罪をした」

という命題を信じているのではない。贖われたということを受けとる。聖霊の注ぎを受けとる。これがみんな信なんです。だから、それは行として展開せざるを得ない。顕現する、現ずるわけです。

今までの無教会のはなぜダメかというと、ただ

「聖書の研究、聖書の研究」

と言って観念で、実は律法化している。そういうところを破っていく。塚本先生が言ったよ、

「僕の伝道は実はまちがっていた。手島君と君のが本当だよ。しっかりやってくれ」と。研究に傾きすぎた。ただ、私は学校の先生を長いことやっていたから、手島君みたいに正面切っての伝道には非常に遅れてしまった。どちらかというと、私は学の方の経路を通っているからね。いわゆる学者じゃないですよ、私は。詩を書く方ですから。

●我はキリストの門なり

要するに、我々自身が門――しかも、その「活ける門」とでも言いたいものだな――活ける門になっていなければね。ダンテの『神曲』には門がある。地獄の門が、すごい門がある。これは生命への門でなくて、亡びへの門です。

ダンテの『神曲』地獄篇第三歌に、

「われをくぐりて　汝らは入る　なげきの町に
　われをくぐりて　汝らは入る　永劫の苦患に
　われをくぐりて　汝らは入る　ほろびの民に
正義　高いきにいますわが創造主を動かす
　われを造りしは　聖なる力
　いと高き知恵　また第一の愛
永遠のほか　われよりさきに
　造られしもの無し　われは永遠と共に立つ
一切の望みは捨てよ　汝ら　われをくぐる者」（寿岳文章訳　集英社）

義と愛と知恵でもって地獄の門ができているという。この門を通ったら、もう再び希望はない。希望のない門です。また、煉獄にも門がある（煉獄篇第九歌）。

煉獄の門には、一つの階（きざはし）があって、色の白いなめ石――なめ石とは大理石のこと――があって、清くまた透き通って、自分の過去の姿がこれに映る。第二の階は紫色をしていて、荒く焼けた石でできている。縦の目にも横の目にもヒビの跡がある。その上にうずたかい第三の階があって、それは斑石（まだら）と見えたが、その色は赤で、迸る血にさも似ている。透き通る色と紫色と赤の三つの階が、ある象徴をしているわけです。それをもって自分が清められ、また贖われ、そして天的になるというようなことを表示しているようです。そのようにしてここを通って行けと。そこでこの煉獄で清められていくわけです。カトリック的な思想も多少ありますけれども。地獄の門と煉獄の門とある。天国には門がない。そこは無門関。あとはベアトリーチェに迎えられて天界へ行ってしまうんだ。

要するに、私たちはいわゆる「これは門」というような、対象的には見えない。けれども、その門自身が本当の門である。だから、いわゆる無門の門というわけです。無門なんです。だから、「我は門なり」と。

「我はキリストの門なり」

と、そういう証者が本当のキリスト者なんだ。

「さぁ、なかなかそこまでは、先生、行きません」

なんて。「先生、行きません」ではない。無門の門はちゃんと与えられているんです。無条件でキリストは十字架と聖霊で私たちの中に入っていらっしゃるでしょ。

「エン・クリスト（キリストの中に）、エン・エモイ（私の中に）」

という、その相互一如の世界です。キリストと一つになっているんですから。キリストが

「我は門なり」

と言えば、私たちは

「はい、私も門です」

と言えるわけだ。「はい、私も門です」と言えるんです。パラダイス・ロストの前の世界。そこは「パラダイス・リゲインド」に、再び得られたパラダイスにキリストの恩寵で成っているんですから。我々自身がパラダイスなんだ。だから、パラダイスへの門です。天門です。

「私は天門だから、どうぞ、お入りください」

と。ここは天国、この集会はパラダイスだと。

天門のことは創世記28章にあったでしょ。ヤコブの梯子（はしご）のところです。

「ああ、ここに天の門があった」

と。10節から17節のところ。

「15また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝をまもり汝をこの地に牽返（ひきかえ）るべし。我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり。

「行うまで汝をはなれざるなり」とは、「いつまでも離れないぞ」ということ。行ったら離れるというのではない。

16ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバこの処にいますに我しらざりきと。17すなわち惶懼（おそれ）ていいいけるは畏（おそ）るべき哉この処これ即ち神の殿（いえ）の外（ほか）ならずこれ天の門なり。」（創世記28・15～17）

と。天の門は遍在してます。至るところにある。天門遍在。遍在また遍開、遍（あまね）く開いている。開かれた門です。門は閉じてないんだ、開いている。

だから、「我は門なり」で、

「我は門なり。どうぞお入りください」

というのが伝道なんですよ。皆さん、伝道していかなくては。一年に一人はつかまえて集会に連れてくるという、その気魄でやってくださいよと私は何年言っているかしらんよ。なかなか連れてこないけれども。

「来たりて見よ」

というわけだ、サマリヤの女みたいに。それが天門。我々は門です。我々は真理にあって

は強いですからね。

●我は善き牧者なり

今度は、

「**我は善き牧者(ひつじかい)なり**」

と。我々はまた羊である。

「**わが来るは羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり**」

と。聖書の内容は豊かでこまるよ、楽しくて。聖書を読んでいて、本当に力が来なかったらうそですよ。

「ご飯は食べるけれども聖書は読みませんでした」

ではない。

「ご飯は食べませんでしたけれども聖書は読みました」

と、この次の感話で誰かそういってくださいよ（笑）。ご飯は食べそこなっても聖書は食べそこないませんと。時々、断食するといいんだよ。断食は何のためかというと、我慢するためではない。聖書を食らうため、聖書を飲むためです。今の人は栄養過剰のようだから、時々断食した方がいい。魂が痩せてしまって肉体ばっかり太ってしまってしょうがない。

11 **我は善き牧者(ひつじかい)なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。**

これがさっきの、百行一死に如かずという死です。「牧者は羊のために生命を捨つ」と。我々は詩篇23篇のごとく、豊かに緑の牧場、憩いの汀で神の生命を賜っている。永遠の生命を賜る。この死は無駄死にするわけではない。我々は本来、神の似姿である。

「本来、神の似姿であるひと

霊止(ひと)、「霊が止まる」と書く

神霊が止(とど)まるような霊止(ひと)にまた戻してやるぞ、今失っているけれども、立ち返らせてやるぞ」

と。それが十字架と聖霊なんです。そのために生命を捨てるんだ。もう幾億の人が歴史の終りまでキリストによって救われるかわからない。大変なもんですよね。キリストの一死は無量の救いです。狼、サタンから救ってやる。我々はもう救われてあるんです。

「救われてあるから、いよいよ救われてあれよ。救われてあるから、信ぜよ」

ということです。

「信じたら、救われるよ」

ではない。逆ですよ。恩寵が先なんですから。恵信一如と私が言うのは、恵みが先で信仰は後なんです。信じたら恵まれるではない。恵みに圧倒されるから信じざるを得ないだけのはなし。

何か「信仰、信仰」といって、信仰を何ものかと思うのは困ったものだ。信念だと思っている。

信念ではくたびれてしまうよな。だからもっと、私みたいにバカにならなければダメですよ、皆さん。あまり真剣すぎてしまって。私は八方破れです。八方破れで隙がないというやつ。宮本武蔵にだいぶ似てきた。まぁ抜けてしまわなければダメです、

「どうだ、こうだ」

なんて言っているうちは。無人なんです、無き人。自分を何ものともしない。何かにしたら、くたびれてしまうよ。みんな偉すぎて困るよな。

本当に瞑想してごらんなさい。キリストにあってもうすっかりすっ飛ばされた、十字架ですっ飛ばされた、完全に自我がなくなってしまったという、その絶対恩寵の現実を本当に祈りの世界で受けとってごらん。それは痺(しび)れてしまうから、独りで。聖霊が来るよ。もう来ているんです、何もみんなで祈らなくたって。それをやらないから困るよ、みんな。何かお願いではないですよ、祈りというのは。その現実で、今度は人のために祈ってごらんなさい。力が来るから。

「先生が祈っているから、いいや」

ではダメだよ、聞いている方は。

「先生が祈らなくたっても、キリストに直結しますよ」

と、それでいいんだ。

無即無限無量。その「即」の字が大事なんだ。数学的な「イコール」ではないよ、この「即」というのは。本当に無を受けとれば、もうそこに次元的に無量の世界が展開してくる。

「この無が本ものならば、かくならざるを得ないぞ、無量ならざるを得ないぞ」

と、それが「即」なんです。

「何も無いものがどうして無限無量なんでしょうか」

なんて、頭で考えていたら絶対に分からない。

●愛知

14 **我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、**

「知る、知る」と書いてある。「真知」とでも言おうかな。こんな言葉は今日初めて言う。本当に受けとると、これが「知る」なんです。本当に受けとって知るということは、「愛知」である。愛知というのは哲学の愛知ではないよ。受けとるとは愛を受けとることなんだから。愛の主体を受けとることなんだ。「知る」ということと「愛する」は同じことになる。

みんな「ざるを得ない」世界です。知らざるを得ず、愛せざるを得ず、信ぜざるを得ずと。圧倒するからね。もし、そうでなければ、逃げていくよりかしょうがない。

「もう嫌だ、キリスト教は」

と言って、逃げて行ったりする。逃げてどこへ行くか知らんよ、キリストの道、キリスト道、キリストそのものから逃げたら。

15 **父の我を知り、我の父を知るが如し、**

はっきり言ってらっしゃるね、キリストが。父の我を知り、我の父を知る。もう父とは本当に、「あなたが私だか、私があなただか」という世界がこの「知る」ですよ。

「あなたが私か、私があなたか分からない」

という、それが本当の「知る」です。一つになってしまっている。それが「知る」であり、「愛する」であり、「信ずる」である。みんなこれは同じことですよ。まぁイエスはそういうひとなんだもの。神さまと本当に一つになった。だから、驚くべき言葉が出てくるし、驚くべき行為が発するし。我々もキリストを本当に受けとってごらん。不思議なことが起きるんだ。無教会で全然起きないことが、手島君や僕を通して起きたんだから仕方がない。

●一つの群ひとりの牧者

我は羊のために生命を捨つ。16 我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、

異邦人のこと。

之をも導かざるを得ず、

これも「導かざるを得ず」と書いてある。この「ざるを得ず」も強いんです、正に。これはいい訳です。導かないではいられないということ。

彼らは我が声をきかん、

今に聞くことになる。我々がそうです、「彼ら」です。20世紀の東のはての私たちが、これが「他の羊」です。我々はユダヤ人ではないから。

遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。

ついにもう国境はいらん。人種の差別もいらん。ユダヤ人、ギリシア人の差別もいらんと。いつまでも「国境、国境」とやっているから、平和はこないんだよな。芸術の世界には国境がない。本当の芸術はみなそうです。ベートーベンは世界のベートーベンだ。レンブランドは世界のレンブランド、ミレーは世界のミレーだ。世界連邦なんてものは作っても作らなくても――なかなかできないでしょうけれども――形の上で世界連邦でなくても、みんな国境があったって、あれどもなきにひとしという、これが本当の世界連邦なんだ。これが本当の「ユナイテッドステイツ・オブ・ザ・ワールド」なんだ。どうして、こうイデオロギーの対立をやっているかね、本当に。『芸術の魂』（小池辰雄著作集第二巻、１９７６年刊）に私は書いたでしょ。

「本来東西無し、いずこにか南北あらんや」

という。東西も南北もありはしないと。

「迷うが故に三界の城、悟るが故に十方空なり」

という。素晴らしいね、ああいう言葉は。地球はまん丸で、東西南北がないようにできているじゃないですか。球形というのは素晴らしいものだ。どの点も中央であるし、どこか

ら見ても東と西があるし、南と北があるし。まぁ不思議なものだね、こんなでっかい地球が空間に浮かんで走っているのだからね。まぁ不思議でしょうがないよ。太陽というのは凄い力を持っている。太陽の光熱がなくなって運動がなくなったら、地球はどこかへすっ飛んでしまう。

私は天文学者になれば良かったな。まぁ学者にならなくたっていいよ。いろいろな面で知りたくてしょうがない。我々は地球に住んでいるから、ブラジルだのアルゼンチンだの、日本の裏側の人は向こう側に逆さに立っているんだけれどもおこっちない（笑）。引力で動いている。みんな、不思議に思わないですか。当たり前かもしれないが、何でもないようなことに驚嘆すると、真理がつかめてくるんです。ニュートンがそうでしょうが。リンゴが落ちるのは何でもない。ところが、その落ちるということでパッときたのが引力の問題になる。万有引力という。

「之をも導かざるを得ず」という。私たちは、キリストに導かざるを得ずして導かれているわけです。これはキリストの言葉ですよ、ヨハネの言葉ではないんだ。

「お前たちも導かざるをえないよ。そして、一つの群ひとりの牧者となる」

と。

「はい、どうぞ引っ張ってください」

と。キリストはただ一人の牧者。全世界のクリスチャンは一つの群れ、エクレシア、キリストの幕屋です。我々ひとつびとつはみんな幕屋、「聖霊の幕屋」、プニューマの幕屋です。全世界は「キリストの幕屋」です。新天新地がくると今度は、「神の幕屋」になるわけです。ちゃんとそのことは既に、私は『無の神学』に書いてある。

「遂に一つの群ひとりの牧者となるべし」

と。我々はカトリックであろうと、プロテスタントであろうと、本当の意味においてはキリストに在って一つだ。どこへ行っても握手ができる。何派であろうと。それを、「お前はこの派だから」と言って向こうで握手を拒んだりするからね、ダメだよ、そんなのは。

「あなたは何ですか。洗礼を受けてますか？」

「いや、受けてない」

「ダメです」

なんて言う。洗礼は上からきているよね、人からではない。上からです。

無教会の本当の展開は幕屋なんです。そのことを書いても、あの『無の神学』は誰も何とも言わない。みんな白眼視するか、敬遠するか、無視するか、そんなもんだ。いいんだよ、それで。今に解るときが来るから。

●生命を捨て生命を得る

17之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたたび生命を得んために生命を

捨つる故なり。

ここではっきり、キリストは復活のことを言っている。みんなのために贖いの生命を捨てる。十字架にかかる。けれども、またこれを得る。復活して得るという。大したひとですよね。「三日目に宮を建てるぞ」というのもそのことです。

「三日目に活ける宮たる私が復活して顕れるぞ」

と。それは活ける宮なんだ。宮ならざる宮。だから、黙示録に言っているように、

「神の国には、お宮があるかと思ったら、なかった。羔が即ち宮であった」

という。

36 **然るに父の潔め別ちて世に遣し給いし者が「われは神の子なり」と言えば**
とて、何ぞ「瀆言(けがしごと)をいう」というか。

「私は神の子である、私がメシヤである

「人の子」ということは「神の子」です。

と言って、みんな聖別してやるのに、神のものとするのに、

「聖別」とは神のものとすること

瀆言(けがしごと)を言うとは何事だ」

と。

37 **我もし我が父のわざを行わずば我を信ずな、**

「ちゃんと父のわざを行っているではないか。散々やっているではないか。行っていなければ信じなくたっていいけれども、事実、行っているではないか。見ろ」

と。本当は、

「私を受けとれば、お前たちもできるようになるぞ」

ということなんだ。

「我よりも大いなる業をなさん」

なんて言われている。

38 **もし行わば仮令(たとい)われを信ぜずとも、その業を信ぜよ。**

「わざ、わざ」と言っている。「業」はさっきの行為と同じで、「行」です。「百見一行に如かず」ということ。これは未だかつて誰も言わないね。今日初めて出てきた言葉だ。

さらば父の我におり、我の父に居ることを知りて悟らん』

うれしい言葉だね、こういう言葉は。

「父の我におり、我の父に居る」

という。

「我の汝に居り、汝の我に居る」

と。キリストとその関係が楽しくてしょうがないでしょ。もう「信ずる」なんていう言葉はいやになってしまう、面倒くさくて。

「我のキリストにあり、キリストわれに在る」
と。これはすぐそういうように読めるんです。だから、
「キリストに在るから、我々を通してこんな業が、こんな言葉が出てくる」
というわけです。

39かれら復(また)イエスを捕えんとせしが、その手より脱(のが)れて去り給えり。

それはもう捕まるもんか、キリストは。もう捕まっていい時だというときには、キリストは捕まってしまう。捕まったんじゃないんだ。捕まえさせてやったんだ、ローマの兵隊に。蹴散らそうと思えば蹴散らせたんだけれども。

18人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、復これを得る権あり、我この命令をわが父より受けたり』

「生命を捨て、生命を得る」とは即ち、十字架にかかり復活するということです。その権能はちゃんといただいていると。

19これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争(あらそい)おこり、20その中なる多くの者いう『かれは悪鬼に憑かれて気狂えり、何ぞ之にきくか』

自分を神の子だとか、神と同じようなことを言っているのは、とんでもないキチガイだというわけですよ。ユダヤ教からいうと、そうだろうね。モーセを立てていて、他のものは立てないんだから。悪鬼だと言う。

21他の者ども言う『これは悪鬼に憑かれたる者の言にあらず、悪鬼は盲人の目をあけ得んや』

悪鬼が開けることができるか、事実が証明しているではないかと。そう言って反論したわけです。いくらしたって、このパリサイ人なんかはなおさら硬化するばっかりだ。まぁそんなもんですよ、世の中というものは。けれども、
「本当のものはその後の世に失われずして留まる」
とゲーテがいいましたが、その通りです。
そのようなわけで、

「我は門なり」

というのはキリストの言葉であると同時に、我々自身が、恵みの現実として、「我は門なり」ということがはっきり言えるんです。
「まだなっていません」
ではないですよ。「我は門なり」ですよ。それは恩寵を受けとらなければ、「我は門なり」とは言えないよ。だから、私は讃美歌でも言ったでしょ、
「大胆に伝道しろ」
と。「大胆に」とは、キリストの大胆が来ているから。ただ、空元気を出すことではないですよ。本当の平伏しのところに権威があるんです。終わります。